

敬助の浄瑠璃聴き・松江市八束町二子

令和3年4月27日掲載

収録・解説・酒井 董美^{たまた}

イラスト・福本 隆男



語り手 足立チカさん（明治27年生まれ）
収録・昭和44年7月22日

あらすじ

とんとん昔があつたげな。敬助がお月さんの夜に下駄はいてカラコンロンカラコンと寺津へ行きよつた。そげしたとこめが、寺津の阿弥陀さんの堂で、琵琶のような三味線をデーデンデーと弾くもんがおお。敬助も好きだけけん、
「今晚は、ああおまえさんは義太夫をやらつしやあますか」てて言つて行きたら、
「はい、まあ下手な横好きで、マネごとですが」て言う。
「なんと、おらも好いちようが、一段聴かせてござつしやらんか」てやなことだつた。
「そんならまあ、聴いてござつしやい。ここに座布団の上に座つてござええ」
「いや、ここで結構ですが」
「いや、必ずここに座つて聴いてござな、義太夫やらん」
浄瑠璃弾きがそう言うので、
「ほんなら、まあ座らせてもらいます」てて、敬助が座つた。

「そうしたとこおめが、何やあましょか。太閤記の十段目が十八番でございませが」
「そんならそれを聴かせてござせ」
デーデンと太閤記の十段目を夕顔棚からやあだいたげなが、
「そうしたとこめが、なんとけえ、その三味線弾きめが、座布団ぐるめにクルクルクルーつと敬助を巻いて天井へ上げてしまつた。
天井へ上がったとこおが、鏡のような目をしたクモがおつたげな。
「それから、敬助はきようとおぞてねえ、恐ろしくて恐ろしくて」
「助けてえー、助けてえー」てて、天井でずんどん大騒ぎしたら、
堂のそばの人が目を覚ましてシヨンベ（小便）しに出て、とうとうどげだだやら堂の方で、
「助けてえー、助けてえー」てていう者がああだけん、
「それから、まあ、こりや大事だわーてて、まあ、早こと堂のかどまで出さつしやい」てて、寺津じゅ

解説

う触れ回つて、みんなは熊手やら鎌やら持つてきて、天井をぶち割つたら、敬助はクモの巣の中へ引き入れられて、今まあ食われえばかりのときだつた。
「そおを寺津の人たちが助けてねえ、クモを退治しなげなてえ話で、そればつかあ、こつぽお。」

関敬吾『日本昔話大成』にあつて見ても、直接該当するものはないが、しいて言えば本格昔話「愚かな動物」の中の「蜘蛛女」がそれに近い。ただ、この話は昔話ではなく、寺津地区の堂というように特定の場所が決まつているところから、これは伝説に属するものといえよう。また、同じ地区の安部伝さん（明治18年生）からは、赤坂の寺の堂に化け物の、その話をうかがつているが、その内容がこの「敬助の浄瑠璃聴き」と大筋では同じだつたことが筆者の印象に残つている。
（元島根大学法文学部教授）

